

難聴を伴う認知症の方への看護介入における対話支援機器 「コミュニケーション」の有用性を確認

<ポイント>

- ・世界で最も高齢化が進んでいる日本では、65 歳以上の 50%に難聴があり、難聴は認知症発症リスクや認知機能低下、精神症状に影響を及ぼすことが分かっています。徳島大学大学院医歯薬学研究部の千葉進一准教授率いる研究チームとユニバーサル・サウンドデザイン株式会社は、難聴を伴う認知症の方に対する看護介入の際、対話支援機器「コミュニケーション」※1を継続して用いることで、認知機能や認知症に伴う行動・心理症状、生活の質にどのような影響を与えるかについて、研究発表を行いました。
- ・看護介入時のコミュニケーションの活用は、認知症患者の「認知機能」や「認知症に伴う行動・心理症状」が改善され、「生活の質」の向上が示唆されました。また看護師の負担軽減につながる効果も期待されています。
- ・今後は、さらに多くの患者を対象にした臨床試験を通じて、コミュニケーションがもたらす支援効果の確認と、看護介入の新しい手法としての普及に努めていきます。

<報道概要>

徳島大学大学院医歯薬学研究部の千葉進一准教授率いる研究チームと、ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社(本社:東京都港区 代表取締役:中石真一路、以下『ユニバーサル・サウンドデザイン』)の代表取締役・中石真一路は、対話支援機器「コミュニケーション」を用いた難聴を伴う認知症の方への継続した看護介入が、認知機能や認知症に伴う行動・心理症状、生活の質(QOL)にどのような影響を与えるかを検討した研究成果を、四国医学雑誌にて発表しました。この研究は、コミュニケーションを使用した看護介入が認知症の方の認知機能や認知症に伴う行動・心理症状、生活の質、また看護師の負担軽減に寄与する可能性を示しています。

検証の結果、以下において成果が示唆されました。

- ・認知症患者の「認知機能」や「認知症に伴う行動・心理症状」が改善される可能性が示唆されました。
- ・認知症患者の「生活の質」が向上し、患者と周囲の交流や自分らしさの表現が向上する可能性が示唆されました。
- ・看護師の看護介入時の負担軽減にもつながる効果が期待されます。

本研究により、コミュニケーションの活用が難聴を伴う認知症患者に対する新たなケアの選択肢を提供し、患者が自分らしさを維持しながら生活できる環境づくりの促進に寄与することが示されました。

今後、さらに多くの患者を対象にした臨床試験を通じて、コミュニケーションがもたらす支援効果の確認と、看護介入の新しい手法としての普及に努めます。そして、認知症ケアにおける技術活用の可能性をさらに追求し、患者やその家族、ケアに関わるすべての方々の負担を軽減する一助となることを目指してまいります。

【用語解説】

※1) コミューン：対話支援機器（指向性スピーカー）「comuoon®（コミュニケーション）」

世界初の耳につけない意思疎通支援機器。これまでは、聴こえに悩んでいる人が自ら、聴覚支援機器を装用する形が一般的でしたが、装用する機器が苦手な方もおられ、その場合、周囲は「大きな声での対応」が一般的でした。「comuoon®」は、「話す側から意思疎通支援を行う」逆転の発想から生まれた、マイクとスピーカーから構成される、対話支援機器です。聴こえに悩む方、その方と関わる健聴者の方、その間に必要だったサポートがカタチになりました。「comuoon®」の活用による「聴こえのユニバーサルデザイン」は、医療機関や介護施設、薬局、行政機関を中心に 5,700 ヶ所以上の施設で導入しています（2024 年 11 月時点）。



コミュニケーションを使用した関わり



コミュニケーション

【研究発表概要】

目的： 難聴を伴う認知症の方に対話支援機器「コミュニケーション」を使用し、看護師が介入を行う際の認知症症状への効果を評価しました。

方法： 入院中で難聴を伴う認知症患者 4 名を対象に、看護師がコミュニケーションを使用して関わり、以下の項目について、介入開始前、開始 1 ヶ月後、2 ヶ月後、3 ヶ月後で評価を行い、変化を追跡しました。難聴の有無は、語音聴取評価機器で評価し、難聴の有る認知症患者だけを対象としました。

表 対象者の情報

対象者	年齢（歳）	性別	語音聴取率（％）
A	80歳前半	女	50
B	80歳前半	男	20
C	80歳前半	男	20
D	70歳前半	男	75

介入開始前の調査が終わった後に、3 ヶ月間、看護師が患者にコミュニケーションを使用し関わりました。

看護師は援助しながらコミュニケーションを使用するため、肩から紐をたすき掛けにしてコミュニケーションを腰の位置に吊り下げ、マイクは耳にかけて固定するものを選び、両手を自由にして看護業務を妨げないようにしました。

〔評価項目〕

- ・認知機能／Mini Mental State Examination-Japanese (MMSE)
- ・認知症に伴う行動・心理症状と看護師の職業負担度／Neuropsychiatric Inventory-Nursing Home Version (NPI-NH)
- ・認知症者の客観的な生活の質／Quality of Life of Dementia Japanese (QLDJ)

心理検査の実施について、介入開始前、開始 1 ヶ月後、2 ヶ月後、3 ヶ月後に、MMSE を研究者が患者に実施しました。

また、開始 1 ヶ月後、2 ヶ月後、3 ヶ月後に、患者を援助した看護師が、NPI-NH と QLDJ で患者を評価しました。

なお、NPI-NH と QLDJ を評価する看護師は一人に固定しました。

介入開始前、開始 1 ヶ月後、2 ヶ月後、3 ヶ月後で、各心理尺度の評価の変化を評定しました。

結果：難聴を伴う認知症患者 4 名に対し、コミュニケーションを使用した看護師の 3 ヶ月間の介入により、2 名で認知機能(MMSE スコア*図1)が改善し、2 名で認知症に伴う行動・心理症状(NPI-NH スコア*図2・3)の軽減が確認されました。生活の質(QLDJ*図4・5・6)では、1 名で周囲との生き生きとした交流、3 名で自分らしさの表現、1 名で対応困難な行動のコントロールの向上が見られました。

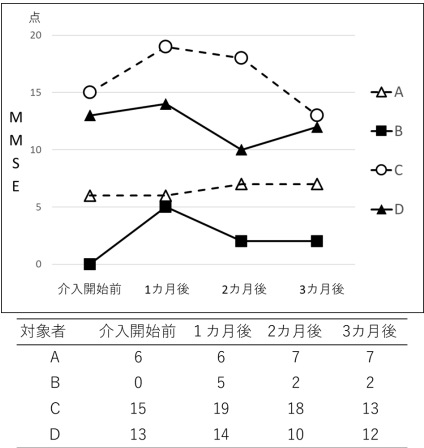


図1 MMSE得点の変化

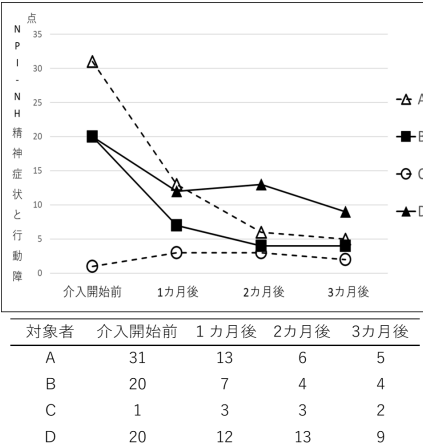


図2 NPI-NH精神症状と行動障害得点の変化

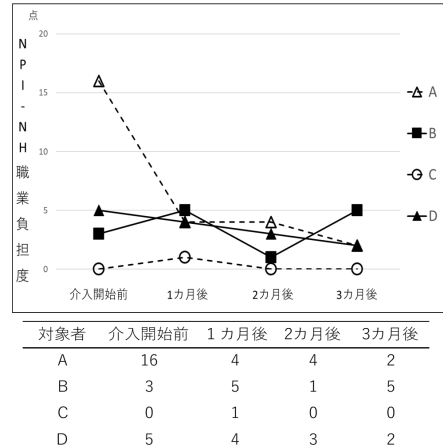


図3 NPI-NH職業負担度得点の変化

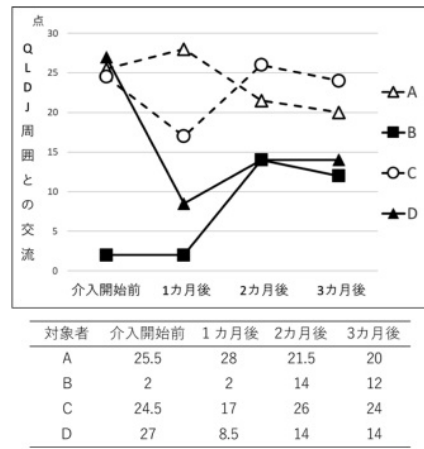


図4 QLDJ 周囲との生き生きとした交流得点の変化

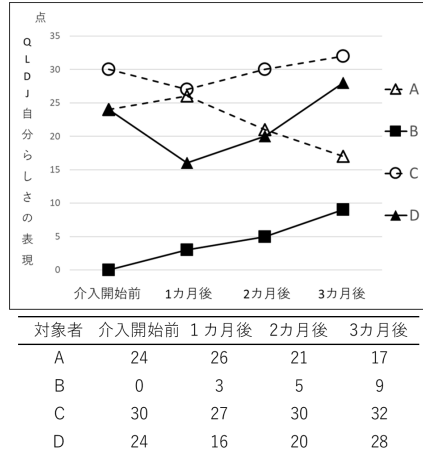


図5 QLDJ自分らしさの表現得点の変化

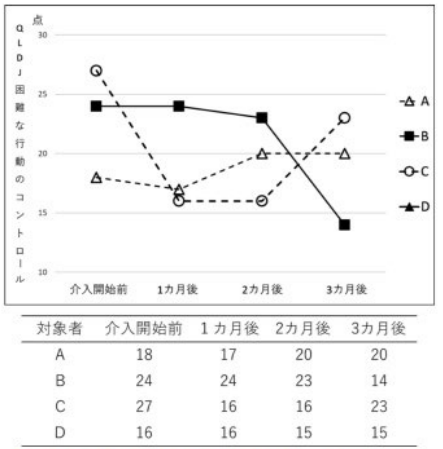


図6 QLDJ 対応困難な行動のコントロール得点の変化

結論：

コミュニケーションによる補聴が認知症患者の認知機能や認知症に伴う行動・心理症状、客観的 QOL、看護師の職業負担度に影響を与える可能性が示唆されました。

今後は、介入期間の延長や難聴に特化した QOL 尺度の使用、性差を考慮した QOL 評価の検討、対象者数を増やし、統計解析を行う等、本研究を継続して実施してまいります。

【論文情報】

掲載誌：J-STAGE 四国医学雑誌/80 巻 (2024) 3.4 号/書誌

https://www.jstage.jst.go.jp/article/shikokuactamedica/80/3.4/80_113/_article/-char/ja

<PDF ダウンロード>

https://www.jstage.jst.go.jp/article/shikokuactamedica/80/3.4/80_113/_pdf/-char/ja

論文名：指向性スピーカーを使用した看護介入が難聴を伴う認知症患者の臨床症状に与える影響の検討 第一報

著者名：千葉 進一, 小松 龍矢, 中石 真一路, 竹安 敬子, 堤 理恵, 豊内 紳悟, 棕本 琢磨, 友竹 正人

DOI: https://doi.org/10.57444/shikokuactamedica.80.3.4_113

お問い合わせ先

＜研究について＞

徳島大学大学院医歯薬学研究部 メンタルヘルス支援学分野
准教授 千葉 進一

電話番号：088-633-7614

メールアドレス：chiba.shinichi@tokushima-u.ac.jp

＜ユニバーサル・サウンドデザイン／コミュニケーションについて＞

ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社

代表取締役 CEO 中石 真一路

電話番号：0120-033-553

メールアドレス：usd-press@u-s-d.co.jp

＜その他、徳島大学に関することについて＞

徳島大学蔵本事務部医学部総務課総務係

電話番号：088-633-9116

メールアドレス：isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp